

史遊サロンの通信

No. 252号
平成28年
5月5日

編集
042-754-9360
arai-hiroshi@
jcom.home.ne.jp
新井宏

三月十九日(土)

はじめての『史遊サロン』

世話役としては、どんなスタートになるか緊張しながら会場にむかったが、あいにく電車の乗り継ぎが悪く、到着したのは開催三時の十分前。入口で村上邦治さんに会って、ほつとしながら会場に入ると、もう十四人定員の部屋が一杯になっていた。やつと自分の席を確保したが、その後からも続々参加者が現れ、結局十九名にふくれあがった。

今回、初参加の伊藤清功さんが、補助椅子の手配に駆け回って下さったおかげで、窮屈ながら、予定時刻に会を始めることができた。予想外の参加者の内訳は、初めての方三人(宇野正雄さん紹介の山崎良一さん、神津眞さん紹介の八重樫豊さん、鯨游海さん紹介の伊藤清功さん)や、旧史遊会会員の山本鎮雄

さんと鯨游海さん。新規のスタートにいわば応援に駆けつけて下さったのであろうが、やはり嬉しい。他には、静岡市からわざわざ参加して下さった中島茂さんもいた。

会は千坂精一さんの『上杉綱勝急死事件』の講演から始したが、これは史遊会の時から予定されていたもの。

……出羽国米澤の上杉家で起こった当主綱勝急死事件は、家中のみならず外戚も絡んでそれぞれの欲望を達せんがための極めて醜悪な御家騒動であった……と語る千坂さんは、上杉家の歴代家老千坂兵部のご子孫。

綱勝が嗣子なく急死したため、本来なら断絶となるどころ、綱勝の岳父・保科正之の仲介で、綱勝の妹富子が嫁いでいた高家吉良義

今月の史遊サロンは都合で第三土曜日ではなく、第二土曜日の五月十四日に変更されています。お間違えのないように。会場は定例の銀座ルノアール八重洲北口会議室です。
なお、七月の史遊サロンは予定通りの第三土曜日の七月十六日です。

央の幼い長男・綱憲を末期養子として迎える。吉良義央は忠臣蔵の上野介である。

これらの経過を詳しく話しては、時間ばかり掛かる。千坂さんも心得たもので、事件の背景については、かなり省略して話された。そのため、上杉・吉良家の関係を良く知らない初参加の方にとつては、分かりにくかったかも知れないが、いきなり関連した話題で盛り上がる。何しろ、千坂家老とか色部家老などのことを同時代の隣人のように話す方が何人もいる。文化人としても有名な協和銀行の色部頭取は色部家老の後裔とのこと。

それよりも嬉しかったことは、千坂さんが話題提供を史遊会設立当初のことから始められたことである。もはや史遊会設立者で残るは千坂さんだけであるが、その運営方式をめ

ぐつては、当初からサロンの方式を希望する流れもあったと言う。

そんな趣旨でもあったと思うが、話題提供は十分ほどで切り上げられた。

まずは、質問が出る。そうすると千坂さんばかりでなく、代わりに面白い補足が出てくる。それにまた反応する方がいる。講演方式は体系的な勉強にはなるが、百家争鳴的な面白さには繋がりにくい。ガヤガヤワイワイ。

そんな形で、ほとんどの参加者が何らかの発言をされ、酒組の二次会も十四名と盛況であった。

その他にも、わざわざ事情があつて欠席するとのお知らせを下さつた方もおり、ますますのスタートにお酒が美味しかった。

さて、今月十四日の『史遊サロン』も、成り行き形の運営でも話題に困らないと思う。

ちよつと話題を挙げてみても、山本鎮雄さんが『目耕録一定年退職後の晴耕雨読一』を上梓されたし、鯨遊海さんが二八三頁もの『漢詩の流れ・潮騒録』を史遊サロン協賛の形で出版された。

サロン通信には、諸橋奏さんの「釈尊・玄奘の御真骨発見と異聞」に続いて「江戸本所と勝海舟」、森下征二さんの「天智天皇の実像―日本初代の天皇は誰か?―」に引き継いで、

歴史本格研究の「祢軍墓誌に出現した日本」と興味ある論考がある。ちよつと補足して頂くだけでも、かなりの時間を必要とするだろうし、質疑を通じて、難しい問題にも理解が進むであろう。

高橋正彦さんの「問題提起」もある。ただし、例題的に採り上げた事例が科学的分野に偏っていたため、一方の講演方式では、最初から付いて行けない方もいて、それが「解らん、面白くない」となっている面もあるようだ。質問を多く入れて、理解を図れるように工夫してみたい。

中島茂さんの「清見寺と坐漁荘」や村上邦治さんの「出雲・佐太大神」も内容がある。咸臨丸の最後については全く知らなかったが、そこに歴史を感じたし、西園寺公望の坐漁荘が、大正・昭和の歴史舞台であり、二・二六事件にも登場していたことも初めて知った。

「佐太大神」の佐太は猿田彦の白鬚神社すなわち、新羅に繋がるかも知れないなどと勝手の想像をする。

私の「洛陽発見の三角縁神獣鏡」も、これこそ「独断と偏見」である。

また、新聞ニュースの話題では、江戸時代中期に来日したイタリア人宣教師、ヨハン・シドッチの遺骨が文京区のキリシタン屋敷跡

から出土、DNA鑑定の結果、イタリア人特有のものである事が解つたという。シドッチを尋問した新井白石が『西洋紀聞』等を書いたことで、吉宗の蕃書解禁に繋がり、蘭学を興隆させ、明治維新で欧米を半周遅れで追いつけることができたのだと思っている。

なお、会の運営について、若干お知らせすると、会場予約は全く問題ない。三ヶ月前から予約可能であるが、早々と予約表を覗いてみるとガラガラである。既に七月十六日(土)の予約も済ませてある。

それから、『史遊会通信』や『史遊サロン通信』を私のホームページの載せているが、ウェブ業者の都合で <http://arai-hist.jp/> に移動する。

載せることのできる容量が百倍と飛躍的に増大するので、様子を見ながら、未掲載の『史遊』『史遊会通信』を順次、PDFで掲載したい(今までは通信の一七二号以降のみ掲載)。

乞うご期待いうところか。

『史遊サロン』の原稿(随時・随意)送付先

arai-hiroshi@com.home.ne.jp

〒252-0242 相模原市横山二の十四の六

新井 宏

称軍墓誌に出現した「日本」

森下 征二

僅か四年半前のことである。二〇一一年一月二三日付の朝日新聞に、日本古代史における注目すべき記事が発表された。

この『日本』の名称の最古の例か」と題する記事は、中国の西安で発掘された、百済人の將軍である称軍の墓誌について、次の様に紹介している。少々長いが、記事をそのまま引用する。

【中国の古都・西安で見つかった墓誌（故人の事跡を刻んで墓に収めた石板）に、「日本」との文字があることを紹介する論文が中国で発表された。墓誌は六七八年の作と考えられるとしている。日本と名乗るようになったのはいつからなのかは古代史の大きななど。大宝律令（七〇一年）からの見方が有力だったが、墓誌が本物ならさらにさかのぼることになる。

中国の墓誌を研究する明治大の気賀沢保規教授（中国史）によると、論文は吉林大古籍研究所の王連竜氏が学術雑誌「社会科学戦線」

七月号に発表した。称軍という百済人の軍人の墓誌で一辺五九センチの正方形、八八四文字あり、六七八年二月に死亡し、同年一〇月に葬られたと記されている。

百済を救うために日本は朝鮮半島に出兵したが、六六三年に白村江の戦いで唐・新羅連合軍に敗れる。その後の状況を墓誌は、「日本餘嚙 抛扶桑以通誅」と記述。「生き残った日本は、扶桑（日本の別称）に閉じこもり、罰を逃れている」と言う意味で、そうした状況を打開するため、百済の將軍だった称軍が日本に派遣されたと記している、と気賀沢教授は説明する】

記事は更に末尾に、鈴木靖民国学院大教授のコメントを次のように付け加えている。

【記された内容や拓本に、本物であることを疑う要素は見あたらぬ。今回の発見で、六七〇年代に日本と呼ばれていたことは確認できたといえる。高句麗や百済が滅亡するなど、東アジアの政治状況が激変する中、「倭国」に代えて「日本」と名乗り始めたことになる。大宝律令は、後にそれを明文化したと考えることができるだろう】

この記事の通りだとすれば、六七八年に西安で製作された墓誌に、「日本」と言う国号が刻まれていることから、中国側は既にその時、我が国が「倭国」から「日本国」に改号したことを知っていたことになる。

従って、我が国が中国に国号変更を通告したのは、大宝の遣唐使・粟田真人ではなく、咸亨元年の遣唐使・河内鯨であることが証明される訳である。あわせて、国号変更は、天武や持統ではなく、天智天皇によってなされたことが明らかになる。

しかし、墓誌の発見から四年半……。墓誌を発見した中国は勿論、我が国や韓国の学界において、色々な角度から墓誌の研究が進み、「日本」と言う語についても、膨大な数の論文が発表された。

概括すると、中国の学界では、墓誌の拓本を発見した王連龍氏を筆頭に、「日本」||国号説に立つ学者が多い。彼らは、「日本」国号が正式に成立したのは、咸亨元年（六七〇）だと考える。

ところが我が国においては、王連龍氏の日本||国号説がむしろ少数派で、非国号説の方が有力になっている。墓誌に記載された「日本」は国号ではなく、それが「国」を指すと

しても、「百済」を指しているのではないかと説くのである。

激しい論争が続き、まだ決着がついていないようだが、非国号説は、日本＝百済とするなど、我々素人にはわかりにくい所がある。そこで次に、非国号説の代表的な学者である東野治之氏の学説を取り上げ、これを検討することにしたい。

東野氏は自説の概要を、「日本国号の研究動向と課題」の中で次の様に主張された。

【墓誌の主人公である祢軍は、百済出身で唐に帰順した武將で、対百済、高句麗戦に活躍、百済滅亡後の戦後処理をめぐって倭にも使いた。そのことは「日本書紀」や「海外国記」にも見えている。

墓誌は一行三十字、全三十行になるよう企画され(全文八八四字)、祢軍が没した六七八年(儀鳳二)に近い頃造られたと考えられる。

この墓誌を研究、紹介した王連龍氏は、墓誌の文中、次の箇所注目し、日本国号使用の最古の例とされた。

去頭慶五年、官軍平本藩日、(中略)于時、日本餘噍、拋扶桑以誅誅、風谷遺叱、負盤桃

而阻固、(中略)以公格謨海左、龜鏡瀛東、特在簡帝、往戸招慰

(去る頭慶五年「六六〇」、官軍、本藩を平ぐる日、(中略)時に、日本の餘噍、扶桑に抛りて以て誅を誅、風谷の遺叱、盤桃を負いて阻み固む。(中略)公、海左に格謨し、瀛東に龜鏡たるを以て、特に帝に簡ばるることに在り、往きて招慰を戸る。(ルビは森下)

確かにそれが正しいなら、日本国号は儀鳳年間には唐に知られ、使用されていたことになる。しかしながら、この墓誌の「日本」を国号とするのは早計であろう。(中略)かいつまんで記すと、先ず墓誌の本文全体にわたり、唐、百済、新羅、高句麗などの国名(王朝名)が全く使われず、工夫した間接的な表現になっていることに注意しなければならぬ。

このような周到な用意のもとでは、「日本」がその国名であったなら、撰文者は当然その使用を避けたはずである。「日本」、「日域」、「日東」などが、日本に限定されず、広く東方、極東を指して使われることのあることは、既に先学の指摘するところである(ゴシック化は森下による。以下同じ)

引用文の最後、私がゴシック体にした部分、東野説の根拠になっていようかと思う。それでは、東野説を成立させた、その先学とは誰か? それは東野氏のもう一つの論文、「百済人祢軍墓誌の『日本』」の中で、次の様に書かれている。

【まず大切なのは、「日本」は国号という先入観に囚われないことである。「日本」は、中国から見て日の出るところ、いわば極東を意味する言葉であって、国号としての「日本」も、時代を経て定着していった。早く小川昭一氏が明らかにしたとおり(『唐代の日本という称呼について』『中哲文学会報』一、一九七五年)、唐代には「日本」や「日東」、「日域」が、新羅を指して使われるのは珍しくもなかったし、高句麗を「日域」と呼んだ例もある。

こう言う表現は突如生じるはずはなく、当然その前段階があったとみられ、むしろ日本国号は、そのような「日本」の用例を参照して採用されたのであろう】

これで明らかのように、東野氏の言う先学とは小川昭一氏のことだった。それでは早速

小川氏の「唐代の日本という称呼について」

をひもときその内容を検討することにした。小川氏は先ず、中国の書籍に日本人だと掲載された人物の名前に注目し、日本人ではなく新羅人ではないかと推測される。例えば「韓志和」とか、「朴山人」と言う名である。

しかし、当時の名前だけで、国籍を判断できらるうか？ 阿倍仲麻呂は中国で、「朝衡」と名乗ったし、遣唐使・「井真成」の例もある。「日本書紀」には、日唐混血児が登場するが、その中には「韓智興」や「趙元宝」など唐風の名もある。名前が新羅風の三字だからと言って、新羅人だと言うことにはならない。凡そ、意味がない理由である。

次に小川氏は、唐代の詩人が詠んだ詩文を取り上げ、新羅と日本の同一性に注目される。彼は先ず「文苑英華」の錢起の詩の中から、次の二つの詩を取り出して比較された。

送陸珽侍御使新羅

錢起

衣冠周桂史 才学我鄉人
受命辞雲陸 傾城送使臣

重送陸侍御使日本

錢起

万里三韓国 行人滿目愁
辞天使星遠 臨水簡霜秋

なるほど、この二つの詩は何れも、錢起が

陸珽と言う人物が故国に帰る時に、彼との別れを惜しんで詠った詩であろう。同一人物が同じ国に帰るのに対し、一方の詩題の国名は新羅であり、他方は日本となっている。これを見る限り、錢起は確かに、日本と新羅を混同していると言えらるう。

小川氏は次に「全唐詩」から、齊己の詠んだ一篇の詩を挙げられる。

送僧帰日本

齊己

日東来向日西遊 一鉢閑尋偏九州
却憶鷄林本師寺 欲帰還待海風秋

この詩の題が「送僧帰日本」とされながら、

故郷の寺の名称を「鷄林本師寺」と詠っている。「鷄林」は新羅の別称であるから、齊己もまた、日本と新羅を混同していた可能性はある。

最後に、小川氏は「全唐詩」の中から、無可と尚顔の詠んだ詩の題だけを挙げて比較する。

送朴山人帰日本

無可

送朴山人帰新羅

尚顔

朴山人が国に帰る歌を、無可と尚顔の二人が詠んだが、無可は朴山人の国を日本とし、尚顔は新羅と記した。二人のうちどちらかが間違ったか、日本と新羅を混同していたことになるう。

小川昭一氏の「唐代の日本という称呼について」の中で、「日本」と新羅が混同されたとされる例は「新羅風の人名問題」が一つと、僅か三篇の「詩」だけである。(他はすべて、「日東」とか「日域」が新羅を指して使われた事例ばかりであった)

たったこれだけの事例を取り上げて、「唐代は一般的に「日本」という語を以て、東方や極東を意味する普通名詞として使われた」と言えらるうか？ 私見を言えば、余りにも不十分である。

それだけではない。これらの詩人の生存時期にも問題があった。次に、彼らの生存した時期を示す。

錢起【七一〇年〜七八二年】

齊己【鄭谷(八四一〜九一〇)の友人。従って、九〜一〇世紀の人であるう】

無可【賈島(七七九〜八四三)の従弟

従って八世紀後半〜九世紀の人であるう】

尚顔【無可と共に「朴山人」を読んでいるので、無可と同時期の人。八世紀後半〜九世紀】

これで明らかになったことは、四人の詩人が何れも、七〇二年の、粟田真人の来唐以後の人物であると言うことである。日本史学界の通説では、唐国に初めて国号変更を伝えた人物を、粟田真人だと考えるので、これら四人の詩人は何れも、倭国が日本国に改号したことを知り得る時代の人物だったことになる。それにも拘らず、彼らが日本と新羅を混同したことは、我が国の改号が中国で徹底しなかったのか、或いは、唐代の一般人は、極東諸国に関心が低く、厳密に国名を区別しなかっただけのことではないか？ 況や改号すれば、益々曖昧になるのは仕方がないことだろう。何れにせよ、東野氏が「百濟人祢軍墓誌の『日本』」の中で書かれた

『日本』の中で書かれた

【唐代には「日本」や「日東」、「日域」が、新羅を指して使われるのは珍しくもなかったし、高句麗を「日域」と呼んだ例もある。こう言う表現は突如生じるはずはなく、当然その前段階があったとみられ、むしろ日本国号は、そのような「日本」の用例を参照して採用されたのであろう】

は成り立たない。

何故なら、東野氏が言われるような、「日本」という用例がまず極東にあり、それを参照して、我が国が国号に採用した」とする根拠は、少なくとも小川氏の論文の中では確認できないからだ。繰り返しになるが、小川氏が挙げた「日本」を詠んだ詩人たちは何れも、我が国が国号変更を告げた後の詩人だからである。そうだとすれば、東野氏の「日本国号は、(中略)大宝令制定の過程で、既に(中国で)使われていた漢語から採用され、大宝公式令の条文に立てられた」とする説も、根拠を失うことになるだろう。

ここで一步も二歩も譲って、東野氏が言われるように、「日本」が東方を指す言葉であり、祢軍墓誌上においても「日本国」を指さないものだとすれば、一体何を指していることになるだろうか？ 当時の朝鮮半島情勢(当時、半島は高句麗、百濟、新羅の三国鼎立から、唐と結んだ新羅の統一過程にあった)の分析からか、東野氏は「百濟人祢軍墓誌の中の『日本』」の中で、次の様に断言されている。

【「日本餘嚙、扶桑に抛りて以て誅を遁れ」の意味は明らかである。「日本」は闇に滅ぼされた百濟を言い、その残党の活動を述べたものである】

このように、東野氏は「日本」とは「百濟」であると言われる。それまで「百濟」を「日本」と呼んだ先例はあったのだろうか？ それに、祢軍墓誌は「百濟」を指して二度も「本藩」と表現している。同じ墓誌の上で、一方では百濟を「本藩」と呼び、他方では何故「日本」と呼ばなければならなかったのか？

東野氏は「百濟」を「日本」と呼んだ先例と、「本藩」と「百濟」を書き分けた理由を、明らかにしなければならぬだろう。

以上、我が国で最も有力な説である東野氏の学説を検討してきたが、私は「日本」を「百濟」と解するのは、どうしても無理だと思う。

やはり、ここは素直に、「日本」を国号と見るべきだろう。祢軍墓誌上の「日本」は、王連龍氏の言うように、現在確認できる最も早く、「日本」国号を石に刻んだ資料なのだ。

そして、この墓誌はまた、「新唐書」卷二二〇の、「東夷・日本伝」の中に記された、「咸亨元年、遣使賀平高麗。後稍習夏音、悪倭名、更号日本」の記事と共に、天智による国号の変更と、それが咸亨元年に唐に通告されたことを示す証拠である。

興津探訪―「清見寺」と「坐漁荘」

中島 茂

四月六日、好天に誘われて久しぶりに興津（静岡市清水区興津）を訪れた。五月の連休後に横浜在住の高校時代からの親友T君が来清するので、その下見のためである。

JR静岡駅から興津駅まで十五分、そこから徒歩二十分ほどで清見寺に着く。総門越しに見える境内の桜が満開であった。

臨濟宗妙心寺派に属するこの寺は鎌倉中期の開山で、東海の名刹の一つとして知られている。

大方丈に入ってみると、参詣者は数名、深沈とした雰囲気漂っていた。

正面には琉球王子筆の「永世孝亭」の額が、両脇の壁面には朝鮮通信使の詩文が掲げられ、江戸期には異文化交流の舞台でもあったことを物語っている。

大御所時代の家康も再三来遊し、能の舞を催したり、作庭の指揮をしたと言われる。

ついで庭園を廻ると、三角形の石碑が目に入った。「咸臨丸殉難碑」である。

二十年ほど前の現役の教員だったころ、研修の一環としてこの寺に参詣し、この碑を見た。碑面には

「食人之食者死

人之事 従二位榎本武揚書」

と刻まれている。

私は漢文の訓み方とその意味がわからず、かたわらに居た漢字に詳しいO氏にたずねた。

「人の食を食む者は人の事に死す。碌を食む者は哀しいということです。」と回答された。

この石碑が建てられた事情について、山本兼一の山岡鉄舟を描いた作品「命もいらさず名もいらさず」⑩明治篇（集英社文庫）の中に興味深い記述がある。

明治元年九月旧幕府海軍副總裁榎本武揚は駿府を脱走、軍艦八隻を率いて東に向ったが、老朽化して帆船になっていた咸臨丸は清水港に取り残され、追跡してきた官軍艦隊に砲撃され、乗員の死体は湾内にうち捨てられた。

彼らの死を悼んだ清水次郎長は子分に船を出させ死体を収容して弔ったが、数日して駿府藩庁に呼び出された。

お咎めをおそれる妻のおちように次郎長は言った。「仏を弔って咎められるようじゃ、この国はもうお終いだあ。」

次郎長の見識と俠気はたいしたものだと私も思う。

後年戦友等によって「咸臨丸殉難碑」が建てられ、榎本武揚が死者を悼む語を書いた。

明治政府の大官を歴任した彼の心中には複雑な想いがあったのではないだろうか。

清見寺の見学を終って西に徒歩数分、「坐漁荘」に着く。

最後の元勳西園寺公望が晩年を過したこの別荘は、昭和四十六年愛知県犬山市郊外の「明治村」に移された。

私も四十年近く前「明治村」を訪れたが、多くの由緒ある保存建築物をかけ足で見て廻ったので、「坐漁荘」に特別な印象をもつには至らなかった。

最近、興津の地に復元された現在の建物が一般に公開されていることを知り、ゆっくり見学したいという思いがつのついでに。

門をくぐると、木造数寄屋造り二階建ての瀟洒な家が南向きに立っている。敷地約三百坪、建坪は延べ九十坪と資料にある。

時刻は昼近く、見学者は私ひとりだった。

品のいい老齢の男性が邸内を案内し、丁寧に説明してくれた。近くに住むボランティアの方で週三回午前中この仕事をしているとのこと。

それぞれの部屋に趣きがあるが、二階の南面の応接間からの眺めがすばらしい。

西園寺公は常々「庭は清風荘(京都の別邸)がよいが、眺めはここが一番よい。三保も伊豆も邸の中にあるようなものだ。」と語っていたという。

現在は、庭の前方の海岸は高度経済成長期に埋め立てられ、家屋が建ち並び、かつての風景は昭和二十年代の写真で偲ぶしかない。それでも一刻私は応接間の椅子に腰をおろして楽しんだ。

「二・二六事件のとき、西園寺さんはどうされたのですか。」と問うと、ボランティアの方は「車で静岡県庁に走り込み、難をのがれたそうです。」と応じた。

ゆつたりとした静かな時間と空間の中で、突然昭和史の激動のページが私の頭をよぎった。

ほぼ二時間で二か所の見学を終え、静かな充足感を抱いて、午後の見学予定地江尻宿跡(現静岡県清水区銀座)に向った。

近く来市する友との再会、散策が今から楽しみである。

(平成二十八年四月十九日記)

「解らん・面白くない」との

問題点について

高橋 正彦

(A) 本邦の科学レベルの問題点

凹宮山宏君(当方と同年)は某国立大の学長であった事を知ったが、年頭対談で大学改革の要は、9月新学学期制による海外留学生・社会人枠の大学院受け入増にあると述べた。私はこれを聞いてその背景には、某一流大学の学術面の地盤沈下の焦りがあると感じた。例えば彼自身、幼少より父親から英才教育を受けたと聞くが、その研究業績に何があるか思い当たらない。また、大学院では極度の競争・叱咤が日常であるとの同窓生の話を書く。

——これ等の切磋琢磨、受験競争の結果、目覚ましい成果があるかには疑問が多い。

これに対し、当方の関心である環境の鉛汚染の成果を当たると、MIT(マサチューセッツ工大)には見るべき成果があるように見え(本邦はその模倣に終止する)、恐らく環境汚染では世界のトップレベルにあると思う。

五月演示は——「本邦」の鉛汚染の研究は、

- 孰れも汚染の本質の究明が出来ていない事、
- 更にはMITの研究自体にも問題がある事、

——を「部外者の視点」で、逐次具体的に論じた。

(B) 「難解・面白くない」問題への回答

(1) 本件の社会・科学上の重大な問題提起

(本邦学術レベルの地盤沈下問題)は、

——本会等の「見識ある」文化人に対し当然判断すべきモチベーションを提起した。

(2) 更に、科学分野への部外者が、科学分野における核心を、如何にして察知する事が出来るか、——の方法論の提起である。

(3) 方法とは、論文の完全な科学的理解を待たず、是を図示で整理する方法、即ち、「論文の核心は図示にある」と見る主張である。

つまり本論は、本邦環境科学における問題点は「図示」方法にあるとし、是を徹底的に比較対照したものであり、解り易いと期待する。

出雲大社再考 (九)

近世最大危機佐太神社紛争 (一)

佐太大神

村上 邦治

『出雲国風土記』には、島根半島中央部(秋鹿郡)に位置し、秀麗な神名火山として崇められた朝日山(標高三四二丈)東の麓に、佐太大神を祀る佐太神社が位置する、と記載されている。大神と記しているのは、熊野、杵築、野城と、この佐太のみであることから、八世紀初めには、古代出雲国を護る四大神として、特別な存在であったことがわかる。

佐太大神については、多くの逸話が残り、おり、詳細に記載されている。誕生については、その北東にある島根郡加賀の神埼(現加賀潜戸)とし、

丁度産まれようとした時、弓矢がなくなり、母は「勇敢な神の御子であるなら、なくなった弓矢や出て来なさい」と祈願された。すると、角の弓矢が流れて出て来た。その弓矢を取って「これはあの弓矢ではない」と言われ、投げ棄てた。次に、金の弓矢が流れて出て来た。それを受け取り、「暗い岩屋だこと」といわれ、金の弓矢で岩壁を射通された。ここに

御母神の社が鎮座されており、この岩窟を通るときには、必ず大声を反響させて行かねばならない。こつそり通ると、神が現われ、突風が起こり、行く舟は必ず転覆してしまうと、伝えられている。

また、意宇郡総記国引きの項には、八束水臣津野命が「北の門の佐伎の国(隱岐の島)に、国の余りがある」と言われ、童女の胸のような鎌を手に取り、大魚のえらを突くように土地を突き刺し、大魚の肉を取り分けるように土地を切り離し、三本縋りの太綱を打ち掛けて、霜つづらを繰るように、たぐり寄せたぐり寄せ、河舟を曳き上げるようにそろりそろりと、「国よ来い、国よ来い」と引いて来て縫いつけた国が、多久(島根郡)の断崖から、狭田の国(秋鹿郡)である

と、その国土創成の由来を、生々しく記載している。

佐太神の逸話や国引き神話は、出雲国外(九州か)の豪族(佐太氏)が、島根半島北部に上陸し、豊かな島根平野に進出し、住み着いたことを暗示している。また、先住の豪族とは、融和というより、挑戦的・対決的であったことが読み取れる。佐太神社の近くには、古くから熊野神・杵築神(出雲氏)の神戸の里が存在しており、その境界線をめぐり、紛争が絶えなかったことから窺える。

佐太神社の本殿は、大社造りであるが、三殿並立になっており、他には無いものである。正中殿(佐太大神、イザナギ、イザナミ等)北殿(天照大神、ニニギノミコト)南殿(スサノウ等)に一二柱を祀っており、大社との対抗心が感じられる。

この佐太神社と大社との間に、二十年にわたる紛争が起きたのである。ことの発端は、延宝六年(一六七八)佐太神社管轄に属する一神主が、佐太社に申請したが、認められなかったことを諦め切れずに、改めて杵築大社の方に申請し、これを出雲国造が認可したことから、両社の間で紛争になった。佐太側は直ちに抗議したが、大社は出雲の国全体の惣検校であるとして、突っぱねたのである。そして両社の紛争は、ついに、幕府の公儀にまで及んだのである。

この争い、宍道湖の鯉が、大海の鯨に挑む様なものであり、当初は、到底佐太神社に全く勝ち目のない、無謀な訴訟とみられた。

(この項続く)

「江戸本所」と勝海舟

諸橋 奏

激動の幕末・明治期の政治家勝海舟（文政六年（明治三十二年、七十七歳歿）は、その類まれな切れ者故に多くの敵もつくつたにもかかわらず、その評価は今日に至るも絶大である。

海舟の主な事績としては、

遣米使節随行の咸臨丸艦長として渡米、日本人初の太平洋横断に成功、日本海軍の設立。坂本龍馬をはじめ多くの人材育成、江戸城の無血開城の実現。維新後は、明治新政府の厳しい監視役。記録の著作。西郷隆盛・徳川慶喜の名誉回復、旧幕臣の生活援助などがあげられている。

しかし、海舟の最大業績は「徳川幕府を売った腰抜け」との汚名を着せられながら「内戦は、イギリス・フランスにつけ入る隙、口実を与えるだけ」との強い信念のもとに幕府軍の抗戦に反対、一命を賭してこれを貫き通したことである。

この海舟の「国難突破力」については日本のみならず海外でも高く評価されている。

静岡県立大学名誉教授前坂俊之は「世界が尊敬した日本人―最初の国際人にして日本最

大の英雄勝海舟」の文章のなかで、文明評論家山本七平は「勝海舟こそ日本最大の英雄であり、全世界を通じて百年に一人も出ない天才」と激賞しているし、更に明治四年に來日し、海舟にも会って取材した米国人E・W・クラークはその著『カツ・アワ―日本のビスマルク』で「キリスト教徒ではなかったが、彼以上にキリストの人格を備えた人を見たことがない」「海舟の忍耐、危機に臨んでの勇氣、覚悟、指導者の注意深さは神に近い」とまで絶賛していると紹介している。

これら内外の評価もさることながら「無法者の馬鹿」と自称する勝小吉は、自伝『夢酔独言』（天保十四年著、小吉四十二歳・海舟二十一歳）の緒言で、わが息子義邦（海舟の名。通称麟太郎。海舟は佐久間象山書齋の「海舟書屋」にちなんでつけた号。安房守だったので安房と称したが、改元後安房と）を手放しで褒めている。

「息子がじつまい（実明）故に（略）武芸に遊んでいて、おれには孝心にしてくれて、よく兄弟をも憐れみ、けんそにして物を遣わず、僮服をまはじらず、そ食し、おれがこまらぬようにしてくれ、（略）今は誠に楽しい居になった。おれのような子供ができたならば、なかなか此の楽は出来まいとおもう。是れもふしぎだ。神仏には捨てられぬ身とおもう。孫

や其の子はよくよく義邦の通りにして、子々孫々のさかえるようにこころがけるがいいぜ」

海舟の少、青年期の姿が目に見えるようである。

その小吉と海舟父子の「暮し」を「独言」の住居跡からたどってみると

文政二年（一八一九）父勝小吉（旗本男谷平蔵忠恕の三男、男谷惟寅の勝家への養子後の名）十八歳の時、信子と世帯を持ち、本所亀沢町（現墨田区両国四一二五両国公園内）の長兄旗本男谷彦四郎恩孝の庭の一角に普請して居住。六年正月晦日、当地で長男麟太郎

誕生、時の屋敷主は男谷精一郎（長兄の養子）、文政八年、小吉二十四歳・海舟三歳、本所

（南）割下水（現亀沢二二三）の天野左京の地面に移り、普請完成まで二階に借住居。

文政十年、左京が急死し、天野家のもめごとから同町（現亀沢三一六）の山口鉄五郎地面内家作に転居。

文政十三年、小吉二十九歳、海舟八歳、小吉の面倒見のこじれで地主から追い立てを食い本所入江町（現緑四一三五一六）旗本岡野孫一郎の地面に移る。

弘化二年（一八四五）小吉四十四歳・海舟二十三歳、麟太郎、岡野孫一郎の養女民子（砥目屋という商家の娘）と結婚。

弘化三年、麟太郎夫婦、赤坂田町に転居。以上の如く海舟は江戸本所に生れ、その乳児期（〇歳〜六歳）、少年期（七歳〜十三歳）、青年期（十四歳〜二十四歳）の人生で最も敏感・臨界期の全てを本所で過ごしたのであった。

参考までに「本所」は、墨田区の一地区。もと東京市三五区の一。墨田は東京都二十三区の一で、旧本所・向島の両区を統合した名称。「割下水」は掘り割った下水道のこと。特に江戸本所に南北二条あった。現北斎通りは南割下水を埋めて造られた道路で清澄通りの現亀沢一丁目から錦糸四丁目まで約二キロメートルに及んでいる。北割下水は現春日通り。

この海舟の本所生活を知る第一級資料は勿論海舟の『氷川清話』であるが、その学術文庫版刊行に当り、編者松浦玲は、流布本『氷川清話』は最初に編集した吉本襄が海舟の談話を勝手に書換え、歪曲された部分があり、増収録したと記している。

また「元来の海舟談話は圧倒的に時局談である」ので、海舟の本所時代のことは『清話』八項目二五五篇中わずか以下の数篇である。

まず「餅を投げる」の篇は「おれが子供の時には」で始まるものの編者注の如く結婚後の赤坂田町時代の話とみた方が辻褄があい、

本所ものとしてはとりあげにくい。尤も海舟特有の韜晦なユーモアとみることも出来るが。「後援者渋田利右衛門」は「壮い時代」としか年代は出て来ないが、文中「日本橋、江戸橋との間」の書物屋、しかも蘭書の話、更には「二、三日すると、渋田は自分でおれの内へやつてきた。この頃おれの貧乏といったら非常なもので、畳といへば破れたのが三枚ばかりしかないし、天井といへばみんな薪につか

つてしまつて、板一枚も残つて居なかつた」となると、海舟二十歳前後の本所入江町岡野孫一郎地面居住頃とみることが出来る。 「きせん院の戒め」は「昔本所に、きせん院といふ一個の行者があつて、富籤の祈禱がよく当るといふので、非常な評判で」海舟は老父とたびたび行つたという。ところがその祈禱が当らなくなつておちぶれた。その理由は二つで、一つは富の祈禱を頼みに来た素敵な美人を口説き「恐ろしい眼で睨みつけ」られ、「不届千萬な坊主めが」と叱られた。一つは両国で買つて来た大きなすっぽんを料理しようとしたとき「大きな眼玉をして睨んだ」。この二つの事が心に咎めるところとなつて「鬼神と共に動くところの至誠が乏しく」なつた。「人間は平生踏むところの筋道が大切」と聞かされ、海舟は「豁然として悟るところがあ

り、爾来常にこの心を失わなかつた」「この一個の行者こそ、おれが一生の御師匠様だ」。

この篇あたり、意外に海舟の心底か。「飢饉と貧乏」は天保の大飢饉の時の話故天保四年（一八三三）、海舟十一歳。毎日早朝に起きて剣術の稽古に行く前に、徳利の中に玄米を入れ、榎の棒で搗いて精米する「徳利搗」をした、白米を買えなかつた貧乏暮し時代のエピソード。当然本所入江町の岡野家地面に居住していた時の回想である。

「本所に修業したのは剣術」では中津藩士の剣術指南島田虎之助の塾（浅草新堀の道場）に住み込んで剣術修業に励み、毎日、稽古がすむと牛嶋神社（王子権現）で夜稽古や寒稽古を怠らなかつた思い出を語っている。天保九年（一八三八）海舟、家督を相続した十六歳頃のこと。「禅堂に座す」は師島田虎之助「剣術の奥意を極めるには、まづ禅学を始めよ」との勧めで座禅を始めた十九、二十歳の頃（天保十二、三年）のことである。場所は牛島の弘福寺であつたという。多分同じ頃福岡藩士永井青崖に入門、蘭学を学び始めたと思われる。

「勝小吉・勝海舟略年譜、川崎宏編」によれば天保十四年（一八四三）、「麟太郎、剣術の免許を受ける。師の代稽古で諸藩邸を巡回す

るが、洋学を始めたという評判から嫌悪される」とあることから推察できる。

実はこの頃は海舟にとつて非常に重大な時期だったはずである。鎖国下であるが島田虎之助や永井青崖には幕府から海外情報が当然入っていた。特にインドの大部分を支配下におさめていたイギリスが一八四〇年(天保十一)、清国広州に艦隊攻撃をしかけてアヘン戦争が始まり、清国は完敗して一八四二年の南京条約で半植民地化したことは正に一大事件であった。侵略が隣国にまでのびて来たことは当時の知識人にとつて大変な衝撃であり、剣術と共に洋学の習得は急務となった。洋学は則「海防論」であった。海舟の不屈の憂国の志はこの頃に醸成されたものに違いないであろう。

海舟についての第一級資料である『氷川清話』と父小吉著「夢酔独言」には意外に海舟の本所時代を語っているものは少ないとはいえず、『夢酔独言』に小吉・海舟父子の一大椿事が出てくる。有名な「息子麟太郎、犬にかまれる」である。時は天保二年、小吉三十歳。「岡野へ引越して(略)二月めにか、息子(麟太郎)が九ツの年、御殿から下ったが、本のけいこに三ツ目向うの多羅尾七郎三郎が用人の所へやったが、或日、けいこにゆく道にて、病犬に出合つて、きん玉をくわれ(た)が(略)

前をまくつて見たら、玉が下りていた故、(略)篠田という外科を地主が呼んで頼んだから、

きず口を縫ったが、医者が振(ふる)えているから、おれが刀を抜いて、枕元へ立て置いて、りきんだから、息子が少しもなかなかつた故、漸々縫つて仕舞つたから、容子を聞いたたら、「命は今晚にも受合(うけあ)はできぬ」といったから、内中のやつはないて斗(ぶ)りいる故、思うさま小言をいつて、たたきちらして、其の晩から水をあびて、金比羅へ毎晩はだか参りをして祈つた。

終始おれがだいて寝て、外の者には手を付けさせぬ。毎日々々あばれちらしたらば、近所の者が、「今度岡野様へ来た剣術遣いは、子を犬に喰われて、気が違つた」といいおつた位だが、とうとうきずも直り、七十日めに床をはなれた。夫れから今になんともないから、病人は、かんびようがかんじんだよ。」

長い引用になつたがこの一篇に、小吉の手柄が色こく出ており、小吉の理解には最適の一文である。「夫れから今になんともないから」の中に小吉の気持が伝わってくるというもの。父小吉のこの心配を余所(よそ)に海舟はその七十七歳の生涯に公称、五腹で九人の子室に恵まれている。

小吉が平癒を祈り、毎日裸参りをした金比羅様の御利益だったのであろう。因みに金比羅は薬師十二神将の一つで、薬師如来は病苦

を救い、病を治す法薬を与えるという医薬の仏として広く信仰されているが、小吉の参つた金比羅が何所にあつたのかは誌されていない。

偶作家子母沢寛(明治二十五年〜昭和四十三年、七十五歳歿)がこの話をヒントに勝小吉・海舟父子を描いた名作『父子鷹』(昭和三十八年厳冬作)はその舞台を「能勢の妙見堂」に設(し)ちてのことの運びになっており、その

「裸詣」の文中で小吉の妙見様への「さあどうだ妙見様、わかつたか」の生命乞いの喧嘩腰祈願啖呵が感動を呼び有名を馳せているが「父子鷹」はあくまでも文芸作品であり、史実ではないことに一線をおく必要がある。もつとも「古老の聞書を生かした作品で新風をひらいた」寛のこと、あるいは聞きとり時すでに地元では金比羅が妙見様になつたか?ということもありか。ただ信心深かつた小吉は、妙見様は「国土を擁護し、災害を滅除し、人の福寿を増す」菩薩で、金比羅様は薬師如来、と夫々の御利益を熟知し、峻別して参詣していたことであろう。

ところで、人間の成熟は、肉体的完成は二十一、二歳、精神的円熟は四十歳超、知的能力は積極的な頭脳の働かせ次第で一生発達可能というのが定説とされている。これについて東京音楽大学の大場善一教授は人間のもつ

基本的な能力を、官能(五感)・運動能・情緒能(喜怒哀楽の情)・社会能(対人関係・自主能力)・性能・知識能の六つに分類して、その発達段階を説明している。それによれば、

人間の能力形成年齢「100%」は、感覚・九歳、運動・十一歳、情緒・十三歳、社会・十五歳、性・二十歳、知識・一生であるという。

翻って海舟の生い立ちを眺めると、その人間形成は全て本所で培つちかわれたことは勿論のこと、八歳で入江町の岡野孫一郎屋敷に落ち着くまでに能力の殆んどが、八、九十パーセント形成されていたということになる。況んや九歳の珍事は生命にかかわることであっただけに海舟の人間形成に多大に影響を与えたことであろう。父小吉の情愛の強さをいやという程に知ったであろうことは勿論、あのようにして周囲に生かされた一つしかない生命を、人生を、誠をもって日本国とその人々のために捧げようと決意したのは案外この本所の九歳の時だったのでは、と思うのであるが。

(主な参考文献)

『氷川清話』勝海舟／江藤淳・松浦玲編(講談社)

『氷川清話 夢酔独言』勝海舟／勝小吉 編

者川崎宏 (中央公論新社)

『それからの海舟』半藤一利 (筑摩書房)

『父子鷹』 子母澤寛 (中央公論社)

『勝海舟一両国生まれの幕臣』 墨田区教育委員会

『両国歴史散歩 高札めぐり』 墨田区観光協会

『すみだ

見どころ・味どころ』 墨田区銘品名店会

『すみだ 観光ガイドマップ』 墨田区観光協会

サロンて何だつけ？

『史遊サロン』などと気の利いた名前をつけたけれど、その語源や意味などについて、多少気になっていた。イメージはフランスの宮廷。ルイ十五世の公妾、ポンパドゥール侯爵を中心を集った社交会のイメージであるが、ウィキペディアで見るとつぎのようにある。

十七世紀初めのランブイエ侯爵夫人カトリ
ーヌ・ド・ヴィヴォンヌのサロンがはしり。

ローマ駐在の外交官の娘として生まれ、イタリアの洗練された宮廷に親しんだ後、フランスに帰国した夫人にとって、アンリ四世の宮廷は非常に粗野なものと感じられた。そこで自宅に教養ある人々を招き、私的な集まりを

開いた。そこでは、文学者が自作を朗読したり、文学論、演劇論が交わされるなどした。

その後も、フランスではヴェルサイユ宮殿などで、女主人を中心にした文学サロンが開かれた。ラ・ファイエット夫人やポンパドゥール夫人らのサロンなどが史上有名。ヴォルテール、ルソーら啓蒙主義の思想家たちもサロンに出入りしていた。

また、サロンの定義の項を見ると

一、会話を最も重要なコミュニケーションの手段とするひとつの社交形態である。

二、女性が社交の中心となり、多くの場合、その女性の住居にゲストが集まる。

三、文学、哲学、音楽、芸術、更には政治を議論する場になる。

四、きまった日があり、常連のゲストがいる。

ただし主人とまったく面識のないものも、常連をつうじて出入りできる「開かれた社交形態」である。

五、拘束力がなく、ゆるやかな結びつきとある。

まあ、それほどトンチンカンでもなかったが、日本でのサロンは源氏物語であろうか。いや男性中心であってほしいので森鷗外の観潮楼であろうか。

韓国の「玉璽事件」

新井 宏

二年前の四月十六日に韓国でセウオル号沈没事件が発生した。

その時も、同時進行的に『史遊会通信』に「韓国セウオル号事件に思う」を書いて、「日本が謝罪しないから首脳会談は行わない」と「言いつけ外交」に精を出し、内政面では散々な実績の朴槿恵を批判した。

その頃は朴槿恵政権が誕生して一年余、『まんじ』にも「均衡者外交あるいはポーランドと韓国」を書き、慰安婦問題と南京事件、竹島と尖閣諸島問題で中国との共闘体制をつくり、日本に対する外交的な圧力をかける幼稚な政策を痛烈に批判した。

それから二年、野党の分裂下で行われた四月十三日の総選挙は、問題山積の朴槿恵の与党であっても過半数は問題なく達成するだろうというのが大方の予想であった。

しかし、朴槿恵はあまりにも「我が道」に固執していた。北朝鮮の挑発に対し、頼りにしていた中国からは冷たくされ、米国の圧力で不承不承、慰安婦問題で日韓合意に至ったものの、コミュニケーション能力に欠け、君臨して統治するスタイルは、与党内に親朴派

と反親朴派の対立をつくり、收拾不可能な状況になっていた。

朴槿恵は負ける、いや負けて欲しいというのが、選挙への私の関心事であり注視していた。それにしても与党よりもっと無責任な野党が勝つのはとても無理だとは思っていた。

しかし朴槿恵と親朴派は凶に乗り過ぎた。脱親朴派(反朴派)の立候補者に公認を与えなかったのである。その中に劉承政(リウソンジョン)がいた。

劉承政五十八才、もともととは朴槿恵を支えた新進の政治家であるが、今では朴槿恵を「法と原則、正義を破壊する民主主義者」と批判して、セヌリ党の院内代表にまで登り、将来の大統領候補とまで言われるようになっていく。この劉承政の「温かい保守」「正しい保守」の哲学は、野党「共に民主党」の金鍾仁や「国民の党」の安哲秀に通じるものがあり、国会運営には欠かせない人材であった。

これが朴槿恵を激怒させた。大統領の権限をフルに使い、院内代表の地位を剥奪し、ついには今回の総選挙で劉承政にセヌリ党の公認を与えなかった。そのため劉承政は無所属で立候補せざるをえなくなったのである。もともと朴槿恵にとっては、李明博大統領時代に親朴派が公認から締め出された時の報復のつもりだったのであろう。

これには韓国のマスコミも一斉に「政治史の恥」と攻撃したが、親朴派を擁立した朴槿恵は揺るがなかった。

ところがセヌリ党の代表は、朴槿恵ではなく金武星である。金武星は公認として決まっていた親朴派の候補に対し立候補の事務手続上必要な「代表職印」を持って釜山に逃げってしまったのである。

このマンガみたいな「玉璽事件」によって五選挙区でセヌリ党の公認候補がない状態が出現した。そして劉承政は復活に成功し、セヌリ党は大敗した。まるで、李氏朝鮮時代の権力闘争を見ているようである。

国会で少数派に転落した朴槿恵がレームダック化するのを避けられない。だからこそ同じように国会で少数派に転落しながら、野党を引き込み国政運営に成果を挙げた盧泰愚大統領を見習わなければならない。実は、盧泰愚は韓国で最も無能で人気のない大統領と見なされているが、私は一番評価している。

それにしても他人の国のことに何でそんなにムキになるのか、どこにだって不合理はある。ほうっておけばよいではないか。そうは思いながら、たまたま五月の連休明けに、講演のために韓国に行くこともあり「埋め草」のつもりでこれを書いた。